

お名前 萩原 敏男
ご住所 度会郡南伊勢町内瀬
発生時にいた場所 内瀬地区内
当時の年齢 19 歳

昭和 19 年 12 月 7 日、その日の私は第 2 次大戦による招集を受けており、入隊を数日後にひかえて父とみかん山で大石など重い物の片づけをしていました。突然足元をすくわれる様なはげしい揺れにおそわれ立っていられず、思わずその場に手と膝をついたが、地震と共にすぐ頭に浮かんだのが「津波！あぶない」。当時家では農耕用の牛を飼っていました。余震でまだゆれる中を走って家に帰りおびえる牛を引いて高台の家へ避難。すでに何頭かが集まっていました。みんなと川口の方を眺めているとすぐはまぼうの林を飲み込むような高さで、赤濁りの水が壁のようになって押し寄せてきました。その上を何ばいかの小舟が矢の様な早さで上ってゆくのが見えました。揺れ始めから 30 分位後だった様に思います。水田は刈り取った後でよかったが戦争の末期で若者は招集されてほとんど居らず調製作業の遅れから被害もあった。息子を 3 人も戦地へ送った老母が作業中津波に流されて亡くなった事は、今でも忘れる事ができません。

外にも家屋の瓦のずれ落ちや、海ぞいの低い家の床上浸水。収穫期の事で作業場に入れてあった米・みかん・さつまいもなどそっくり流されて途方にくれる家もありました。

月日は流れて 70 年河川改修もようやく終わり、その効果に期待する所は大きいですが、東海地震や南海地震との連動で災害規模も予想外に大きくなるかも知れず、こればかりは来てみなければわからない。靴をはいて、頭を守り、安全な道を高い所へ早く逃げる事が第一だと思う。たとえ空振りに終わってもそれに越した事は無い。むしろそれを喜ぶ心にゆとりを持ちたいと思います。